

「亀城に船」

亀城公園も、本丸を残して水に浸かり、舟で二の丸まで乗り入れることができた。水面には、太鼓櫓がくっきりと映っている。『むかしの写真土浦』より



土浦の洪水3 ～一ヶ月間の水の生活1～ (霞ヶ浦その30)

1938 [昭和13] 年の土浦の洪水は、未曾有(みだり)いまだかつて起こったことがない)の大災害となりました。今号では、土浦中学4年竹村實(中39回)の「一ヶ月間の水の生活」(以下、《竹村》と略記)(1939 [昭和14] 年3月5日発行『進修第42号』所収)、保立食堂店主保立俊一(中31回)の「今と昔 洪水と土浦」(《保立》と略記)(1994 [平成6] 年発行『水郷つちうら回想』所収)、「学校沿革誌」(《沿革誌》と略記)で、その被害を再現していきます。敬称略。引用文の中の【 】内は筆者による注記です。旧字体は新字体に改めました。

中学生諸君へ、
高校生レベルのもので、意味の分らないところがあっても、気にせず声に出して読んで下さい。そのうちに分かるようになります。

1938 「昭和13」年洪水

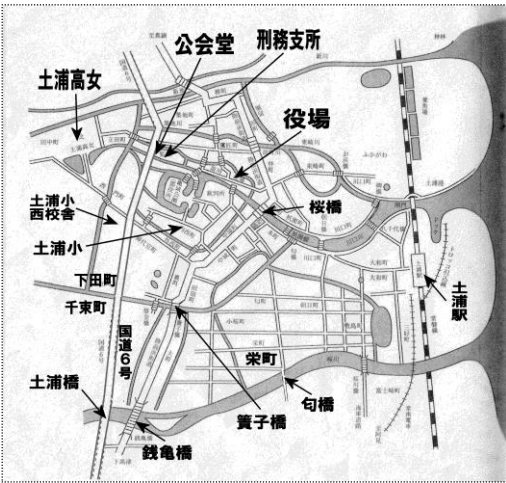
水谷武司は、「茨城南部・土浦の土地環境と災害―水害が宿命である平城の城下町―」(防災講座・地域災害環境―日本各地の災害危険性に関わる自然環境・社会要因・災害履歴―所収)の中で、1938「昭和13」年の土浦の洪水を次のように解説しています。

「昭和13」年6月末〜7月初めの洪水は、「霞ヶ浦の逆水に」桜川氾濫が加わり百数十年来の大洪水といわれる大規模なものでした。停滞した梅雨前線の活動が台風の通過により活発となつて大雨となり、八郷盆地における総降雨量425mmを最大として、県南部の全域で350mm以上という豪雨になりました。最大水位は小貝川(石下北方の大円木地点)で既往(きょう)「過去」最大4.45m(昭和10年)を更新して5.80m、霞ヶ浦では湖尻である北利根川流入地点で既往最大2.49mを超える3.85m、土浦町川口で平水位0.18mに対し2.50mを記録しました。利根川の水位は既往最大よりも2m以上高いものであつて、桜川など流域河川からの流入が水位上昇の最大要因でした。

このため低地のほぼ全域が浸水し、利根川水系(霞ヶ浦を含む)における氾濫面積は882km²、県全域で1234km²と県面積の5分の1が浸水しました。浸水面積は小貝川水系で207km²、桜川水系で101km²、霞ヶ浦湖岸低地では74km²でした。県全体の被害は死者・行方不明49人、住家流失149人、全壊314人、半壊727人、床上浸水8230人、床下浸水1075人などであり、新治郡で被害が最大でした。桜川では流域平均日降雨量の最大が242mmという年超過確率200分の1を超える規模の豪雨を記録しました。このため全川で破堤15箇所、破堤延長1930mに達し、岩瀬から土浦に至る桜川低地は全面浸水し、

浸水面積100km²(流域面積365km²)、住家浸水戸に及びました。土浦では桜川堤防が虫掛地先など数箇所決壊したので、土浦町(市制は昭和15年)の被害は大きく、最大浸水深は3.1m(外西町)に達し、浸水は1ヶ月以上続きました。地盤の高い土浦駅付近は避難場所を提供しました。土浦町の被害は死者・行方不明6人、住家全壊10人、半壊51人、浸水4850人などでした。罹災(れいさい)「被災」戸数および罹災人員は全町の95%にも達しました。」

6月29日(水)雨



昭和初期の土浦町

《竹村》「二昨日よりの雨は益々盛んとなり、学校に行く頃は門前まで水がおしよせ、裏も一杯になつた。学校へ行つた時は半身ずぶぬれであつた。時間が来ても授業は始まらず、出水の恐れあるため三時間の短縮授業であると掲示された。」
《保立》「ゆれる土手の上で不安な数時間が過ぎた。十時頃、下流は危険だからというので引揚げの指示が出された。三好町の仮橋(常磐線鉄橋と桜川橋の間に架けられていた木橋)の警戒についた。桜川を流れて来る流木を橋杭(はし)は、橋桁を支える(く)いからにはなす作業をした。昼過ぎ、町内浸水の危険があるというので町に帰って来て町内に警戒するよう連呼してあるいた。」
《沿革誌》「豪雨、出水ノ恐有リト認め、短縮三時間授業。午前十時半全生徒帰宅セシム。」
《竹村》「放課後家に帰つた時は、門前は長靴も没する位で門内にも多少水が入つてゐた。」
用事があつて「土浦町」役場に行つたが、その時は役場の人々は大変な騒ぎであつた。町民も大勢押しかけて桜川土手決壊の危急(ききゆう)危険が迫る(きこ)をうけてゐる様子だつた。「川口町の土浦」郵便局へ寄つて帰つた頃はもう縁側につきさうになつてゐたので、此の分では畳もあげねばなるまいと折よく来合せた徳島屋さんに手伝つてもらひ、母と妹と共に床上げをした。」
三時少し前玄関先が十一・五糶(む)、「門前二十一・四糶であつた。」

《保立》「六月二十九日、朝六時、「現在のつくば銀行本店の所にあつた土浦」町役場屋上のサイレンがけたたましく鳴らされた。六月半ばから降り続いた雨で、桜川が増水し連日警戒をしていたのであるが、二十九日払暁(はつきやう)明け方(か)から豪雨となり、消防団、青年団、在郷軍人会(予備)後備役または退役の軍人たちの組織」の諸団体が町役場に召集された。」
私達中城町青年会は、桜川下流の警備を命ぜられ、はげしい雨の中を常磐線下の旧桜川の揚水ポンプ場を警戒することになり朝七時頃現地に着いた。桜川は中流(川の中央部)がふくれ上つて物凄い勢いで流れている。」

《保立》「午後、田中町屠殺場の前の警戒に中城町の消防組と一緒にいった。大曲の角の処の土手に土俵を積む作業である。当時桜川は虫掛から屠殺場前まで直線できて、大きく右に流れを変えていた。強い流れの直撃を受けてふるえる土手で苦闘をした。四時頃、土手がぐずればじめて引揚げ命令が出され消防自動車に乗つて逃げ出した。田中の八幡様(八幡神社)の前まで来た時にはタイヤの半分が水にうまつてやつとのことで国道(旧国道6号)まで帰り着いた。川口(町)か

ら舟を借りて、私は舟が漕げるとい
で、在郷軍人の高梨さんと二人で、千束
町、下田町の救援活動について。増水が
はげしくなり逃げおくれた人達を舟に乗
せ大町まで運んだ。小さな舟なので五、
六人ずつしか運べない。往復何回やつた
ことか、とにかくピストン輸送をくりか
えした。流れが強くはかどらない。」

《竹村》「雨は益々盛んとなり、近所では
皆避難し始めたらしい。午後六時三分
突如としてサイレンは不気味になりひび
き、人々の避難をうながす如く、いんい
ん「殷々、音の盛んなさま」としてひび
き渡つた。」

自分は堤防が決壊したのではあるまい
かと母にたづねたら、まさかさうでもあ
るまいと言はれた。然し前には「水は」
一時間に一寸「いんいん」約3cm一尺の10分
の1「づつ」の量で増してゐたのが今度は
どんどんふえて行くばかり、やはり切れ
たのだと大急ぎで家の者を「土浦尋常高
等小学校の」西校舎「現土浦一中」に避
難させ、一人ごとまづつてゐた。」

《沿革誌》「午後八時刑務支所【現在の亀
城ブラザ付近にあった。】ヨリ電話アリ、
四人ノ避難方、依頼ヲ受け承知ス。」
《竹村》「十時頃は、玄関内で四十三糶、
縁下より五十四糶の深さであつた。しか
し水は刻々と量を増し床上にぐんぐんの
ぼつてくる。それを見てゐると命がだん
だん縮まつて行く様に思はれ恐しくなつ
て避難をしてしまつた。小学校の西校舎
の裁縫室には十二、三組もをつた。」

十二時近くもう一度家にかへつて見た。
水は床上一尺近くも入り細かい道具がう
いてゐた。タンスや其の他のものを更に
一段と高くして歸つた。
其の後睡れぬまゝに窓によりかゝつて
家の方を見つめてゐた。水は益々量をま
し、がうがうとすさまじき音を立て、無
味悪く流れてくる。夜明け近くになり、無
性にねむくなつたが我慢をして起きてゐ
たので非常に苦しかった。」
《保立》「二十九日夜、私は午後田中地先
の土手決壊から逃げ帰り、舟で千束町の
援助活動をしてゐた。午後八時頃、六号



「土浦橋から千束町・大町方面を望む」
旧国道6号沿いの様子。（『むかしの写真土浦』より）

国道【旧国道6号】の千束【町】交差点
附近にいた。当時まだ千束町附近は住居
も少なく、桜川の土手が直接見えたのだ
が、土手を越えて白波を立て、水が流れ
込んで来るのが見えた。国道を段をなし
て水が走つて来る。みるみる水量がふえ
て来た。午後十時過ぎには水深二メー
トルにもなつた。こんな大洪水を予想もし
なかつた私達はただとまどうばかりであ
る。それでも何とか人命だけは助けねば
というこゝで、小舟で千束町の冠水した
道路をこぎまわつた。千束町下田町共に
まだ戸数も少なく、ほとんどの家が平家
であつたので、町の人達は命からがら逃
げるしか方法が無かつた。低い家はのき
下まで水につかり、窓をこわしたり、塀
をのり越えたりしながら何人かの人を舟
に救ひ上げて、大町の簀の子橋【すまほ
の処まで運んだ。
一軒一軒戸をたたき残つた人達をさが
し小舟をあやつつて午前三時頃まで作業
が続いた。夜が明けて千束町の町中を漕
ぎ歩き残つてゐる人が無いのを確認して
中城町に引揚げた。中城町はまだひたひ
たと水が上つて来たところと土地の高低
があれほどはつきり分かつたことはない
国道でも低い処は三メートル近い水深に
なつた。

朝へとへとにつかれて中城町に帰つて
来たが、中城町の通りはまだ二十センチ
ぐらいの水深であつた。家具が流れる、
畳が流れる、油のいっぱい入つたドラム
缶が流れる、町の道路は流れの早い川に
変身した。」

※ 高19回系賀茂男の母、系賀(旧姓福田)
富美(当時、土浦高等女学校2年)は、6月
29日の日記に次のように記してゐます。

「朝からひどい雨で、常陸藤沢駅から乗車
する筑波鉄道の」汽車に乗り遅れてしまひ
ました。「自宅のある東城寺から常陸藤沢
駅までの」道には大水が溢れて長靴の中はぼ
つしやになつて「雨は」カツパも通してしまひ
ました。栗原の人達は自転車にも汽車にも
のれず私達の所まで歩いて来ました。誰も彼
もぬれ鼠でした。」

【次の汽車で】学校へ行くと一時間も終る
所で私達は校長先生が授業をやらす帰つて
もよろしいとおしやつたので直ぐに帰つて来
ましたが汽車は不通になつて自動車につて
来ました。どこを見ても海のやうになつて居
ますので心細くなつてしまひました。」

6月30日(木) 雨

《沿革誌》「午前三時頃ヨリ避難民続々来
り柔剣道場及び教室ニ収容ス。約六百名。
午前十時頃ヨリ囚人数班二分レテ、合計
百四名避難シ来り、講堂【雨天体操場】
ニ収容ス。真鍋町都和村等ヨリ炊キ出シ
有リ。」

《竹村》「昨夜より一睡もせず、窓によ
りかゝつて我が家の刻々と水に浸され行
く様を眺めてゐる中夜も白々と明渡つた
ので部屋にかへつた。と、大変だあつ!
といふので大急ぎで声の方にとんで行く
と根本さんに人がゐるのださうだ。なる
ほど、屋根がむくりむくりとつき出して
ゐる。それ船だと大さはぎをして、やつ
と救助が飛び、板をはがして救ひ出した
時の根本さんの顔は実際ぞつとするほど
血の氣を失なひ、目は血走り体は恐怖と
安心のためかぐくくと小刻みにふるへ
てゐた。昨夜大工さんと荷物を【天井】

裏板にのせてゐる中に出入れなくなつた
のださうである。

方々の家では未だ避難せずに屋根にの
ぼつて大声で助けを呼ぶ者、ハンカチー
フをふる者等々所々に見受けられた。

海軍【霞ヶ浦海軍航空隊の救援隊】の
働きは何んとも形容の出来ぬ働きをしめ
した。敏速、然も懸命に救助作業に従事
し幾多の尊い生命を救はれたのである。
我等の避難せる西校舎へもぼしやぬれで
着のみのまゝ、どどん救助されて来る
者が多数あつた。

水は益々増すばかり終には屋根にのつ
てしまつた。一晚中否それ以上自宅の水
にうづもれて行くのをじつと眺めてゐて
も如何ともすることが出来ぬので実に実
に腹立たしさと悲しさに胸が一ぱいにな
つてしまつた。

昨夜の残り飯を一つたべたきりで午後
二時頃バナナ三本で一日をしのいだ。女
子供に食べさせて我々はたべることが出
来なかつたのだ。国道は八尺といふのだ
からもはや一丈【いちじょう】約3m。一尺の
10倍【じゅうじゅう】近く自宅はなつたであらう。

【近くの】盲学校其他より十五六人避
難して来た。皆で百四五十人の者がごた
ごた入られて雑談をかはしてゐる。天気
は一時回復したが再び曇つてしまつた。
外西町の土師【は】さんが水にのまれて
どうとう溺死したさうである。」

《保立》「三十日は何から手をつけてよい
かただ茫然として町の中の流れを見つめ
ていた。霞ヶ浦航空隊の救援隊が、海軍
のカッター【ボート】を漕いで来たのは
それからである。霞ヶ浦沿岸の村から舟
を借り救助活動に入つた。井戸を水没し
てしまつたので、何より水と食物に困つ
た。近隣の町村からにぎり飯のたき出し
を受け、バケツに水をくんで舟で各町内
をまわつてくばつて歩くのが青年団の仕
事になり、毎日舟を漕いで各町をまわつ
て歩いた。低い所では舟から二階に避難
してゐる人に直接手渡しすることが出来
た。」